

### 3. Empire in Modernity: A Comparative Perspective

(アジア世界史学会第1回国際会議第13セッション)

日時：2009年5月31日(日) 9時30分～12時

場所：大阪大学中之島センター多目的スペース1

報告1：川島真（東京大学）

The Image of Asia in Modern China: Historiography of the Traditional Chinese “World Order”

報告2：Alexander Morrison (University of Liverpool)

How “Modern” Was Russian Imperialism?

報告3：宇山智彦（北海道大学）

Mutual Relations and Perceptions of Russians and Central Asians: Preliminary Notes for Comparative Imperial Studies

コメント：秋葉淳（千葉大学）、青木敦（大阪大学）

アジア世界史学会は、本班のサブリーダーである秋田茂が提唱者の一人となって設立された学会であり、このセッションは、同学会の第1回国際会議に合わせて、本班のスタート段階での研究成果を国際的に発表する機会として設けられた。

帝国は前近代に起源をもつが、近代帝国は、属人的というより属地的な原則に基づく行政の効率化、辺境に関する地理的・民族学的・歴史的知識の収集、民族問題への対処、国際関係の変革など、前近代の帝国とは異なる課題に直面していた。本セッションは、ロシア、清、イギリスの各帝国がこれらの課題にどう対応したかを比較することを試みた。

川島報告は、19世紀中国周辺の国際秩序・貿易秩序（朝貢・互市）をめぐる近年の研究動向を紹介し、そうした過去の秩序に関する記憶が20世紀前半の国民意識の形成においてどう作用したかという問題を設定した。そして、従来の王朝史から「中国史」への転換（梁啓超）、学校教科書・外交史料の編纂の過程を追った後、日本にとって新しい中国アイデンティティは受け入れ難く、1910年代から中国の教科書をめぐる論争が両国の間で起きたことを紹介した。日本のアジア主義が朝貢体制批判を含んでいたのに対し、中国の汎アジア主義は、論者によって異なるが、中国が朝貢国など弱者を助けてきたという「王道」の主張（孫文）や、旧朝貢国・周辺国を中国が吸収すべきだというナショナリスティックな主張を含んでいた。のちには、中国が周辺国の解放を助けるという考えを帝國的過去への言及なしに語る態度が主流となったが、中国の優越性の主張も残っていた。このように近代中国の国民意識・対外認識は、過去の国際秩序の認識と、日本のアジア主義への対抗を軸

に展開したのである。

モリソン（彼については本報告書の4も参照）報告は、そもそも近代とは何か、帝国とは何かという概念整理から始め、海の帝国イギリスと陸の帝国ロシアの共通性は通常思われているより多く、比較対象として有意義であることを示した。そのうえで、ロシアの中央アジア統治とイギリスのインド統治の違いとして、イギリスの方が地元有力者を重視したこと、ロシアの方がイスラームに敵対的だったこと、イギリスの自由貿易志向に対し、ロシアにはアウタルキー志向が強かった（そのため、綿花をアメリカから輸入するのではなく中央アジアで栽培することにこだわった）ことなどを指摘した。特に、地元の有力者やインフォーマントを上手に使わなかったことは、ロシアのコロニアル・ノレッジの発達を妨げた。また、帝国間の比較というよりも、ウクライナとアイルランド、シベリアとカナダといった比較も可能であることを示唆し、統治の性質は中央の政策に劣らず植民地の性格によって決まると述べた。また、近代帝国の特徴の一つは、諸帝国が互いを意識し競争する点にあったと指摘した。

宇山報告は、帝国・植民地比較の際に考慮すべきいくつかの論点を挙げた。第1に、植民者と被植民者の関係は、オリエンタリズム批判が想定するような二分法で語るものではなく、帝国は現地の複数の民族集団等を同時に意識しながら統治を行っており、一つの集団へのイメージも多義的であったことを、中央アジア遊牧民を例に挙げながら指摘した。第2に、「伝統の創造」論、B. アンダーソンの指摘する植民地国家の「分類精神」、キャナダインの「装飾の帝国」論といった概念・方法論を用いた比較の可能性を示した。第3に、一つの帝国・植民地に関する実証研究を他の帝国・植民地に応用する試みとして、英領インドにおけるオリエンタリスト・アングリシスト論争と比較しながらロシアにおけるムスリム教育を論じた。第4に、帝国統治と現地民社会（特に知識人）の相互作用をどう比較分析するかという視角から、ロシアの統治が拙劣で時に抑圧的であったにもかかわらず、現地民側からのロシア・イメージがさほど悪くなかったのはなぜかを試論した。特に、現地民にとって近代化が重要な課題であったことを強調した。

コメンテーターのうち秋葉は、オスマン帝国を近代帝国として分析する際の論点として、遊牧民を含む辺境住民に対する「文明化使命」、植民地主義、オリエンタリズムなどを挙げ、また同時代のヨーロッパ諸国も近代化の途中であったことに注意を促した。青木は、吉村忠典の研究に依りながら、ローマ時代の帝国概念と近現代のそれとの違い、日本語での帝国概念の形成過程を整理したうえで、中国語では帝国という語の初出は1895年で、現在に至るまで中国史上の諸王朝を帝国と呼ぶことはまれであると指摘し、ある政体を帝国と呼ぶ条件とは何かを改めて問うた。

フロアを交えての議論では、帝国の拡張とキリスト教布教の関係、イギリス帝国におけるインドの位置の特異性、「帝国」という言葉が持つ威信や独立性のニュアンス（特に日本

や韓国が帝国と名乗った理由との関係で) などが話題となった。

セッション全体として、話題は非常に多岐にわたったが、近代において帝国・大国が(イギリスとロシアであれ、日本と中国であれ) 互いを大いに意識する競争・対抗関係にあったこと、経済・文化発展や統治の効率化を含む近代化が帝国政府にとっても帝国の住民にとっても重要な課題であったことから、近代という枠組みで帝国比較を行う有用性は立証できたであろう。同時に、単なる近代国家論にとどまらず、中央と植民地や周辺国の多様な相互関係・認識を比較するための論点も、多く提示できたと思われる。

なお、川島論文は、Kawashima Shin, “China’s Re-interpretation of the Chinese ‘World Order’, 1900–40s,” in Anthony Reid and Zheng Yangwen, eds., *Negotiating Asymmetry: China’s Place in Asia* (Singapore: National University of Singapore Press, 2009), pp. 139–158 として刊行された。モリソン論文と宇山論文は、本班が別途刊行する英文報告集に収録される予定である。